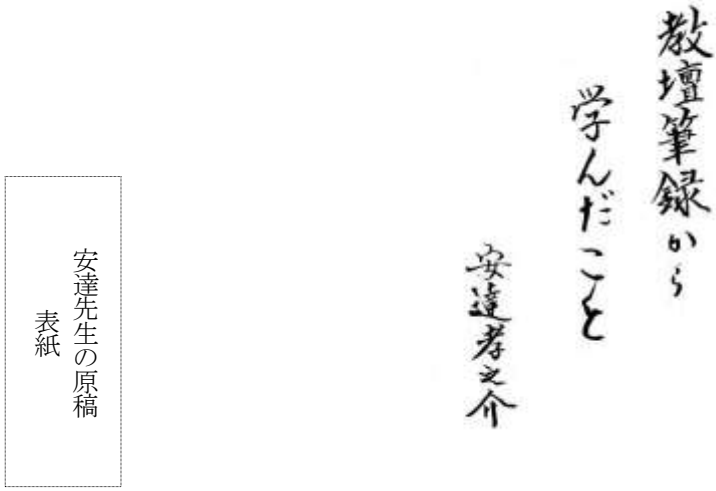


安達先生の原稿
表紙

教壇筆録から学んだこと

安達　孝之介

第百二十九回　国語教壇修養会　教壇筆録を読ませていただき、まことに有難うございます。

修養会が地震で中止となったことはありましたが、あの大震災の大混乱がおさまらない中、夏休みとはいえ二日間も開かれたということに深い感銘を受けました。よくぞ引き受けて下さいました。矢本東小の皆様に、そして、会が無事終了するまで御尽力下さいました会員並びに関係者の皆様に、ただただ感謝あるのみです。

大試練の修養会が成功裡におわった原動力は何だったのでしょう。現在のいずみ会の関係者以外の、目に見えない大きな流れの力があったようにも思えてなりません。

米澤徳一先生が昨年十二月お亡くなりになりましたが、いずみ会々長時代に書かれました教壇筆録の巻頭言を改めて読んでみました。

一、芦田先生の教え

子どもは生まれながらにして、向上の心を具有している。それを自覚させてやるのが、国語の指導であるといわれ、自覚させる為の、教材観、指導の方法を具体的にお示しくださったのが芦田恵之助先生です。それを引き継がれて、私達いずみ会員をご指導下さったのが、鈴木佑治先生である。

二、教式

子どもを自覚に立たせる国語指導を実現するにはどうするか。実現する要は、「教式」にある。教式を行ずることによらざれば実現することができない。

教式による教壇に心肝を砕き、精進することが、一切の要である。

三、教壇の精進

①　読み

教材に盛られた感動を、自分の感動とする読みの急所を、抑えることができる

かが鍵である。難しいことだが、憂き身をやつして勘を砥ぎにかかることである。

裏返して言えば、子ども達は、どういう個所を押えてやると喜ぶかということである。子どもの喜ぶ急所を押えて、とっぷりとわからせるということである。

② 立案

自分の読み取った感動を子どもの『実』にするように立案する。

③ 壇にのせる。

子どもが喜び、心底納得する教壇かを反省することであるが、これがまた十分とはいえないのは、自分の経験を通してもわかる。

四、「いずみ会」の行く道

われわれは、道友と共に半世紀をこえて行じてきた。子どもと共に行じて共に育った実績を維持してきた。道を求める人、道を楽しむ人は、まだまだ少なからずいると思う。

いずみ会の来し方行く末を書き残したこの巻頭言を読み直し、自分自身をはげまし、戒めにしていきたいと改めて思いました。

さて、小生、退職以降、修養会には欠かさず出席してまいりました。しかし、病と老いの為、出席することが不可能になりました。それで、矢本東小学校での教壇は、どんな教壇だったのか、ずうっと気にかけていましたところ、七月に会長さんより筆録を送っていただきました。丁寧に、ゆっくり読ませていただきました。考えてみると、筆録をこんなに読んだことはなかったように思います。

読んでいるうちに、子どもの喜ぶ急所はここではないのか、こうやったらとっぷりとわかるのではないかということが見えてきました。そうだ、会に出席できずとも、筆録を読むだけでも教壇修養ができるのではないかと思いました。

五人の教壇を、「二とく」だけを取り出して、感想を述べてみたいと思います。五人の教壇は、「詩」と「物語文」の二つに分かれていますので、二年、三年、五年の詩の「二とく」についての感想を先に述べ、四年、六年の物語文は、後に述べてみたいと思います。

二年「いろんなおとのあめ」

授業記録を読んで、低学年の詩の場合は、『さし絵』がありますので、これを十分に利用してほしいと、まず思いました。

題目とさし絵をべつべつに扱うのではなく、一緒に扱うことが肝要だと思います。

筆録の第一問は、題目を書いて、「雨の音を聞いたことがありますか。」という問いです。第二問は、「絵の中の誰が雨の音を聞いているか。」という問いです。第三問は、「一つだけの音を聞いているのですか。」です。

題目は、題目だけを扱い、さし絵はさし絵として扱っています。

私だったら次のように扱いたいと思います。

板書、「**いろいろなおとのあめ**」

○　「あめ」から考えましょう。さしえの中で、どれが「あめ」ですか。

（青い斜めの線で、雨を表わしている。）

○　雨ふりの中を女の子が歩いていきました。歩いているうちに、気がついたことがあります。何に気がついたのでしょう。

（音、雨の音に気づいた。）

○　雨の音は、何で表わしているでしょう。

（青い点で表わしている。）

○　どこで、雨の音がしているのか、さがしてください。

（猫のしっぽ、犬の鼻、車の屋根、かえるの背中、雨傘の上、手のひら）

○　あと、ないかな。

（地面にぶつかったとき）

○　雨が降ると、いろんな音を出しているのに気づいた詩です。

○　どんな音がしたか、この詩を全部書いて勉強します。

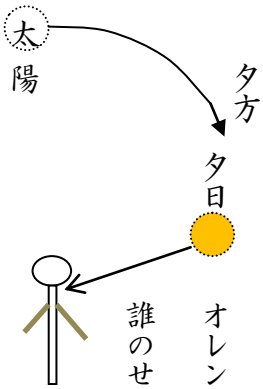
題目とひびきは、一体のものとして扱うことが、子どもによくわかるし、喜ぶように思います。

三年「夕日がせなかをおしてくる」

二年生の詩の場合、題目とさし絵（ひびき）を上手に結びつけることで、詩情を深く理会できましたが、三年生の場合は、さし絵がありません。しかし、秋葉先生は、どんな情景の中でこの詩が生まれ、夕日と子どもたちの心情がどんなものだったのか、題目と略画によって理会させようと努力されています。

題目を通して略画を描く場合、この詩の場合、どんな略画が考えられるでしょうか。筆録を読んで、自分だったらどうするかを考えることが、「二とく」の扱いの勉強に役立つと思います。

筆録の一七ページの板書事項の中から、略画の部分を描いてみます。



○　ここで大事な問いがあります。子どもたちは、これからどこへ行くのでしょう。

（家へ帰るところ）

○　今まで、子どもたちは、何をしていたと思いますか。

（一日いっぱい遊んでいた。）

○　子どもたちのお腹はどうなっていますか。

（すいている。ぺこぺこ。）

○　この様子を見ていたのは誰か。

（作者　阪田寛夫さん）

○　阪田さんに聞こえてきたものがありません。何か。　（声）

○　誰の声か。

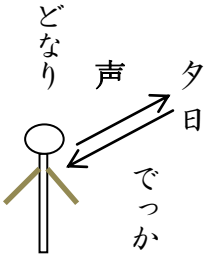
（夕日の声と子どもたちの声）

○　どんな声か。

（太陽はでっかい声、

子どもたちはどなり声）

〈略画につけ足す。〉



略画といっても、画だけにとらわれず、声といった目に見えないものをつけ加えることも、「二とく」では忘れてはならないことのように思います。

五年「山のあなた」

五年生の「山のあなた」の場合も略画を用いて、考えを深めようとしています。

略画に描けば、理解が深まるかというと、もっと大事なことがあるように思いました。

それは、どういう問いを出すか、どういう順序で出すかということです。

書いてある通り、順序よく文字通りの事実を押さえると理解が深まるかというと、そうはいかないように思いました。

「二とく」の扱いはどのようにするとよいと思いますか。

二年生の「いろいろなおとのあめ」、三年生の「夕日がせなかをおしてくる」は、具象的な詩です。「やまのあなた」は、抽象的な詩です。具象的な事柄をどのようにして、抽象的な事柄にもっていくか、工夫がいるところだと思います。私は、次のような「二とく」を考えてみました。

板書、**「やまのあなた」**

○「山」はわかりますね。

（山の略画を描く。）

○「あなた」はわかりますか。

山のどこに「あなた」と書けばよいでしょう。

（上の方）　　（下の方）

あなた　　こなた

むこう　　こちら

われ

○　この詩に出てくる「われ」は、はじめは、どちらにいたか。

（こちら）

〈下の方に

「われ」と板書する。〉

○　こちらにいて、何を考えたか。考えたことは何か。

（「幸」）…（しあわせ　幸福）

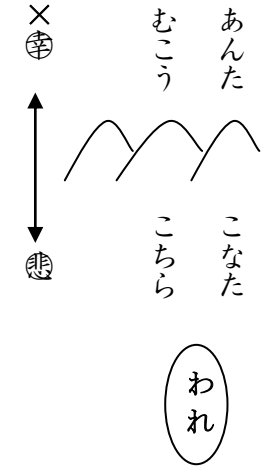
○「幸」をどうしたいと思ったか。

（手に入れたいと思った。）

○「幸」を手に入れる為に、「われ」はどうしたのでしょう。

○「幸」は、手に入ったのでしょうか。

板書を整理すると、次のようになる。



○「手に入ったのは何か。」

（悲しみだけ）

〈手引き〉

どうしたら「幸」が手に入るか、考えながらこの詩を書いて下さい。

「六とく」で、「幸」を手に入れるヒントを考えさせることが重要であると思います。

四年生、六年生は物語文です。物語文には詩とは違った難しさがあるように思われました。中谷先生の「教壇をふり返って」という自省文の中の「一次指導の六とくで「二次指導で扱うところまで踏み込んだ。」という一節には、はっとさせられました。

物語文は詩に比べ一般的に文章が長く、いろんな事柄が詳しく書かれていることが多い。「二とく」の扱いは、題目を手がかりに印象の強い所を抑えながら、文の輪郭をつかませるとなっている。文の輪郭をつかまえるには、ここも大事、ここも大事と、文章のすみずみまで触れることになるように思われるが、「二とく」の難しさは、洗いざらい書かれている事柄を出し過ぎることにある。

初心者は、「二とく」は簡単だといい、経験者は、難しいという。今までの自分の教壇をふり返ってみても、そんな気がします。子どもが喜ぶような、すっきりした教壇を踏みたいものです。

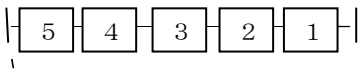
四年「一つの花」

題目を板書する位置は、たいてい黒板の右端に寄せて書きますが、そうでなく考えてみました。

扱いも、題目から入らないで、後で触れる扱いを考えてみました。

○「一つの花」というお話ですが、「さし絵」は、何枚ありますか。

（五枚）



板　書

○このお話の主人公は誰か。誰のお話だと思いますか。

（ゆみ子）

○ゆみ子が何才ころのお話ですか。

（一、二才のころ）

○ゆみ子のお話に「一つの花」という題がついていますが、どこにこの題を書けばいいでしょうか。1か2か3か…どこに書きますか。

（四枚目）

一つの花

5 4 3 2 1

○「一つの花」とあるが、何の花か。

（コスモス）

○　もらったのは誰で、くれたの誰か。

（くれたのは父、

もらったのはゆみ子）

○　お父さんは、コスモスの花をゆみ子にくれた後、どうしましたか。

（汽車に乗って戦争に行った）

○　戦争が終わって、お父さんは帰ってきましたか。

（帰ってこない。）

○　一、二才のゆみ子が、お父さんと死に別れになったお話ですね。

○　こんな時代に、ゆみ子は父母にどのように育てられ、どんな子に育ったでしょうね。

〈手引き〉

父と母がゆみちゃんにしてあげたことを書いて下さい。父のしたことは上に、母のしたことは下に書いて下さい。

父　　母

一つの花

5 4 3 2 1

「六とく」は筆録通りでよいと思いました。

六年「桃花片」

「二とく」の扱いは、「○題目◎ひびき○手引き」と進めよ、と教式では教えていますが、必ずしも、題目を「二とく」で扱わなくてもよいのが、この「桃花片」という教材であると思います。

この教材において、「桃花片」という言葉は、どんな位置を占めているのでしょうか。名人といわれた楊は、ただの職人と思っていた父が、桃花片の水滴を見せてもらって、本当の名人だと心から気づいた。楊自身、父のような名人・職人を目指すことだろうということです。

桃花片を詳しく扱うと、この文章の第三層に入ってしまう言葉です。

筆録を読むと、一次指導の「二とく」でも、「六とく」でも、この桃花片を扱って第三層にふれていて、二次指導で扱うところまで深入りしているということです。

それでは、「二とく」の扱いは、どうあればよいでしょう。「桃花片」を扱う前に、はっきりさせなければならないことは、何でしょうか。

○　この話は、誰と誰のお話ですか。

（楊と父親）

○　二人の関係をおさえる。

（父と子）

（ともに陶工である。）

（師弟の関係である。）

○　世間の評価は。

（楊は名人、父はただの職人）

○　楊自身の評価は、初めはどうだったか。

（楊―名人　父―職人）

○　おしまいは、どうなった。

（父こそ名人と

思うようになった。）

○　これから、そこを目指して勉強していきます。

〈手引き〉

楊の作ったものを探して書いて下さい。

「二とく」をこの程度に扱っておくと、頭に雑然と入っているものが、秩序立てられ、これから深く考えていく場合、非常なる助けとなります。

「ひびき」は、文章の叙述通りにいくのか、印象の強いところからいくか、混同しやすいところです。文章によってピンと響いてものと、こないものがあります。ピンとこないものをピンとやろうとすると、無理が生じます。強くピンときたからといって力みすぎると効果がうすくなります。

二年生から六年生までの筆録を読ませていただき、感想を書くことで、こんなに教式と教壇について理会が深まるとは思いませんでした。

教式を読むとき、教案を立てるとき、教壇に立つとき、皆さんの役に立つことを願っています。

最後に一言

「心から納得して、じっくり読む」ということが、世の中からなくなっていくように思います。テストに答えられるとよいと、それが教育の目標となっていないでしょうか。

一度読んだら紙屑になる教育で、難しい内容をくり返し読むことが少なくなっているように思います。

語学の勉強も会話中心になり、じっくり読むという途は、展けていかないように思われます。

小学校からじっくり読む楽しさを味わうことがなくなったら、日本文化の衰退につながらないでしょうか。心配です。いずみ会の皆さんの双肩にかかっています。今後もよろしくお願い申し上げます。

指導部長安達孝之介先生から平成二四年九月一日付の手紙と共にお送りいただいたこの原稿を、第百三十回教壇室録に載せる打ち合わせを安達先生としました。筆録準備までには時間があるので、すぐにワープロで印刷用原稿に起こしませんでした。そのために、安達先生の校正をいただけない結果となりました。誠に申し訳ない次第です。その意味で、文責は、会長にあります。

安達先生の遺稿となってしまいました。ここに書かれている安達先生の後進への励ましを活かす道を共に考え実践していきたいものだと、改めて思います。道友各位のご支援をお願いします。

安達孝之介先生のご冥福をお祈りいたします。

合掌

平成二五年二月吉日

いずみ会　会長